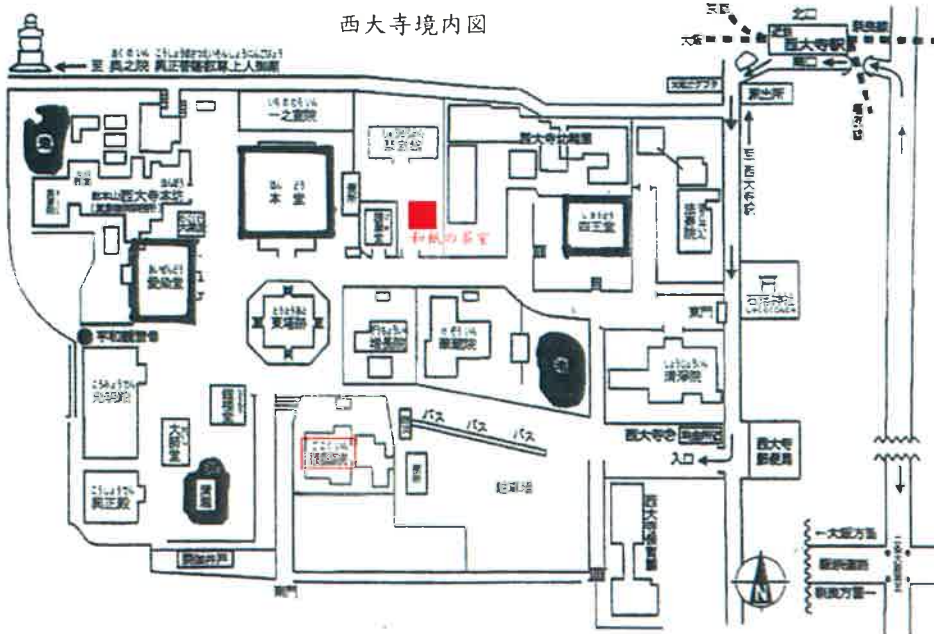


和紙の茶室

西大寺・秋の大茶盛式



【大茶盛式】

大茶盛式は、鎌倉時代の延応元年（1239）から750年以上も伝承されているお茶席です。

西大寺を鎌倉時代に復興した叡尊（1201年～1290年）が、1239年（延応元年）の正月に菩薩流の歳首御修法という西大寺の復興を願う法要を行い、西大寺の鎮守八幡宮に茶を献じました。その余服を集まった人びとに分け与えたのが始まりと言われています。当時、お茶は貴族の高貴葉であり、民衆の手に入らないものでした。もちろん、茶道の作法もない時代。現在のような抹茶茶碗のない時代でしたので、どんぶりや水鉢に注いだお茶をみんなでまわして飲み、和気あいあいと楽しんだそうです。直径40cm・重さ7kgもの大茶碗を使った現在の大茶盛式の席で、いにしへの儀式を体感することができます。

【和の復興について】

僕の実家は、奈良の田舎にあります。田の字型プランに濡れ縁がついた、いわゆるオーソドックスな日本家屋なんです。畳敷きの床に座布団を敷いて食事をしたり、寝そべったり、兄弟や友達と大黒柱を中心に走り回って鬼ごっこしたり、夜は布団を敷いてお爺ちゃんの寝床を取り合ったり。幼少の頃より、畳・ふすま・障子・屏風・衝立・巻物といったものを遊び道具にしては、こっぴどく叱られ、とにかく和の表具と触れ合う機会に恵まれていました。

日々の生活から和の空間を体感し、その魅力を肌を持って体得してきたように思います。シックハウスでアトピーになることなんて無かったし、湿気やカビなど見たこともなかった。ほどよい隙間風や、深い軒先から乱反射してくるほのかなあかり、襖一枚を隔てた隣の部屋の声、もれるあかり、呼吸する壁。和の魅力が尽きることは、ない。

現代の社会では、住まい方の変動からか、新築の住宅やマンションにおいて、和室よりも洋室で、畳よりもフローリングで、といった要望をよく耳にいたします。過剰に密閉され、機械的に空気をコントロールされた住まいって。。

日本人の和室離れは、社会の近代化、グローバル化とともに顕著に現れつつあります。

一方、日本を代表する和紙の生産地である越前では、需要が少ない（特に日本国内で）にも関わらず、職人の多くは、手漉きの技術や感性を落とさないために、日々和紙を漉きつづけています。

きめ細やかな施しを受けた和紙のほとんどが、倉庫で眠っている状況にあるのです。和の空間には欠かせない和紙の危機的な状況を快復し、現代社会に和の空間を復興させるべく、私たちは動き出しました。（文：橋口新一郎）

【和紙の茶室】～和の復興～

・透けること ・柔らかさ ・ぼんやり ・あかり ・緊張感 ・書 ・肌ざわり ・質感 ・吸湿 ・呼吸 ・開けさ
数え上げたらきりがありますが、これら全てが、繊細な和紙と密接に関わる、日本の伝統的な美学のひとつであるといえるでしょう。この度の計画では、和の空間を復興させるアイテムとして“和紙”に着目し、今までにない和紙の魅力を引き出した、お茶室をしつらえ、新たな和の美しさを表現することにしました。

花をのみ待たらん人に山里の 雪間の草の春をみせばや ～藤原家隆～

これは、利休が茶の心を伝える歌として愛誦した歌で、ただ静寂の境地にひたるだけでなく、心を静め新しい力を生み出すことが、茶の心であると述べています。お茶室は、日本の伝統の美学を集約しているといっても過言ではありませんが、新たな挑戦を幾度も繰り返し、日本の伝統となり得たのであります。

【茶室の仕様】

- ・2帖（1.8m x 1.8m x 1.8m）
- ・コウゾの皮を剥いだ枝を組み合わせたものを、主な構造体とし、壁面は和紙を積層させて構築します。
- ・にじり口・茶道口のフレームもコウゾの枝を編んだもので、茶室の全てが和紙の原料であるコウゾで構成されています。

【出展作家】

書：深井万象（書家・奈良市美術家協会事務局長）

器：古瀬文子（赤膚山元窯・8代目古瀬堯三） <http://www1.kcn.ne.jp/~akahada>

茶室：橋口新一郎（建築家・近畿大学建築学部非常勤講師） <http://www.hashiguchi-architects.jp>

後援：大阪内装材料協同組合青年部 <http://www.osaka-naisou.or.jp>